

2019年度 特別研究推進費実績報告書

2020年 4月 24日

北九州市立大学長 様

(所属・職名) 文学部・教授

(氏名) 野井英明

2019年度に交付を受けた特別研究推進費に係る研究実績について、
次のとおり報告します。

研究課題名	対馬の縄文時代前期以降にみられる特異な植生と渡来人の到達との関わりについて					
実施内容・研究成果の要旨 (概要書を別途添付)	<p>対馬は朝鮮半島と日本列島の間であり、歴史的にみると人間が朝鮮半島と日本列島の間を行き来する際の重要な経由地であった。行き来する人間の活動によって、対馬の自然は影響を受けたはずであり、それがどのような影響であったかは重要な問題である。また、逆に自然がどのような影響を受けたかという地質学的データによって、当時の人間の活動を推定することはさらに興味深い。</p> <p>対馬では、人間活動の痕跡としての遺跡が確認されるのは縄文時代早期末からであり、対馬市上県町越高所在の越高遺跡はこの時期の遺跡のひとつである。越高遺跡では2016年以降、熊本大学による調査が行われ、縄文時代早期末までには朝鮮半島から対馬に人間が渡来し、しばしば行き来があった可能性が指摘されている(熊本大学考古学研究室, 2018)。私は、越高遺跡近くの志多留湿原において、他大学の共同研究者の協力を得て、2018年までに手動の試錐によって湿原の地下の深度12.6mまでの堆積物の試料を採取することができた。本研究では、この試料の炭素同位体年代測定によって、深度1050~1200cm付近が越高遺跡に人間が住んでいた時代にあたるということが明らかになった。また、この堆積物の試料の花粉分析を行い植生変遷を検討した。その結果、約2800年前の縄文晩期にイネ科草本類が急増する特徴(稲作の伝来か)、約5000年前の縄文時代中期以降マツ類が連続して出現する特徴(人間活動の継続を示すものか)、約6000年前の縄文時代前期にイネ科草本類が一時的に増加する特徴(雑穀類の伝播か)が明らかになった。それ以前については人間活動の痕跡が見いだせなかった。さらに、プラントオパール分析を行い、イネ科栽培植物の検出を試みたが、初期の目的を達成できる良いデータは得られなかった。</p>					
	合計	使用内訳(単位:円)				
交付決定額	638,439	備品費	消耗品費	報酬	その他	旅費交通費
支出額	638,439	22,000	10,128	0	514,510	91,801
執行残額	0					
共同研究者	所属・職名	氏名		役割分担等		